中学生における無意図的な陰口の検出に影響する要因

―対人スキルと情動知覚の視点から―

金井　春音　石津憲一郎

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究
第16号　通巻38号 抜刷　　令和４年１月

中学生における無意図的な陰口の検出に影響する要因

―対人スキルと情動知覚の視点から―

金井　春音[1]　石津憲一郎[2]

Investigation on Factors Detecting Unintentional Backbiting in Junior High School Students

Harune KANAI, Kenichiro ISHIZU

摘要

本研究の目的は，人間関係がより重視される中学生に焦点を当て，社会的失言という視点から無意図的な陰口を捉え，教師から見た生徒の社会的スキルや，生徒の情動知覚・情動調節のスキルが，無意図的な陰口に関する社会的失言の検出に影響するかを検討することであった。北陸地方の公立中学校のクラスの担任を持つ教師14名，生徒418名を対象に教師評定の社会的スキル，自己評定の情動知覚に関する質問紙調査を行った。無意図的な陰口に関する社会的失言の検出得点を従属変数とした階層的重回帰分析を行った結果，「情動の注目と分かち合い」が無意図的な陰口の検出に対して正の影響を，「非隠ぺい性」が無意図的な陰口の検出に対して負の影響を示した。一方で，教師から見た生徒の社会的スキルは無意図的な陰口の検出に影響を示さなかった。これらの結果から，無意図的な陰口の検出の失敗を防ぐには，他者の情動に注目し，気持ちを分かち合うスキルが必要であることが示された。

キーワード：陰口，無意図，中学生，感情，社会的スキル
Keywords：backbiting, unintentional, junior high school students，emotion，social skills

Ⅰ　問題と目的

文部科学省の児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（2019）において，平成30年度の不登校の中学生は，全体の3.65%であり，小学生の0.70%に比べて多く，人数としては過去最多の119,687人であることが示されている。このような現状の要因として，中学生ではいじめを含んだ友人関係をめぐる問題の要因が30.7%と高い割合になっている。また，岡安・嶋田・丹波・森・矢冨（1992）は，中学生は「教師との関係」「友人関係」「部活動」など，人間関係に関する出来事を特にストレスフルに感じていると述べている。

人間関係を円滑に進める重要なスキルとして，社会的スキルがある。戸ヶ崎・岡安・坂野（1997）は，社会的スキルとは，ある特定の社会的場面で観察される社会的に受け入れられる行動で，その中には不適切な行動を遂行しないことも含むと定義しており，友だちとの関係を形成するために必要な「関係参加行動」，築いた人間関係を向上させるために必要な「関係向上行動」，攻撃的な行動をとらないといった人間関係を維持するために必要な「関係維持行動」の3つの構成要素から社会的スキルは成り立つとしている。対人関係における社会的スキルの重要性は様々なところで指摘されており，児童・生徒において，社会的スキルの欠如によって友人関係のストレスが生じやすいことや（丹羽・山際，1991），友人関係に満足ができず不適応に陥っている子供たちには，主張行動を中心とした社会的スキルトレーニングが有用なことが示唆されている（塚本・濱口，2003）。社会的スキルは行動的な側面からのみ捉えられているわけではない。原田・渡辺（2011）は，感情の認知的側面における気づきの理解と，調整をする感情調整スキルの獲得も，適応的な対人関係につながるとしている。このように，子どもが自らの情動をどのように捉え，調整するのかといった視点は非常に重要とされる（石津・下田，2013）。

対人関係において多様なスキルの未熟さが如実に表れるとされる攻撃性研究では，中学生において攻撃性の種類によって社会的スキルとの関係が異なることを示している（相川，2008）。攻撃性のうち敵意が高い中学生は，社会的スキルの中の関係参加行動と関係維持行動のスキルが低いこと，身体攻撃，言語攻撃，短気が高い中学生は，関係維持行動のスキルが低いこと，言語攻撃が高い中学生は，関係参加行動と関係向上行動が高いという傾向も見出されてきた（大竹・島井・嶋田・山崎・狩野，1999）。しかしながら，子どもの攻撃性研究において，自らの行為が他者にどういった影響を与えているのかということを客観的に俯瞰する，メタ認知に関する研究は

[1] 株式会社アイバック　[2] 富山大学大学院教職実践開発研究科

これまで検討がなされていない現状がある。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2016）によるいじめ追跡調査の「仲間はずれ・無視・陰口」経験（被害・加害）によれば，小中学生において仲間外れや無視，陰口をされた経験があると回答した児童生徒が 9 割，した経験があると回答した児童生徒も 9 割となっている。また，加藤・太田・水野（2016）は，いじめ被害の内容 7 項目について調査し，通常学級の中学生において，「直接、悪口や嫌なことを言われた」と回答した生徒が，中学 1 年生から 3 年生の全てにおいて 1 番高い割合を示した。さらに，いじめ被害の内容の中で唯一，「パソコンや携帯電話 , スマホを使って悪口を書かれた」と回答した生徒の割合が，中学 1 年生から 3 年生にかけて増加の傾向にあることが示されている。

梅津・新井・濱口（2012）は，人は自らの攻撃性を低く見積もってしまう可能性があることを，酒井・塩田・江口（2015）もまた，悪口を言っているつもりがないのに結果的にそれが悪口になっていることがあると指摘しているように，悪口や陰口には，危害を加えることを意図しているものと，危害を加えることを意図しないものがあると考えられる。そこで本研究では，悪口や陰口に関し，悪口表現は特定の他者に対して直接的に侮辱や誹謗中傷，陰口は，その人のいないところで言う悪口という定義（石坂・山本 , 2010）に基づいた研究を行う。

本研究では，危害を意図的に加えようとはしていないものの，結果的に他者を傷つけてしまう無意図的な陰口に着目する。そして，この無意図的な陰口は，心理学的な視点から見ると，社会的失言の認識の欠如という視点から捉えることが可能だと思われる。社会的失言が，無意図・無自覚に他者への不利益やネガティブな感情をもたらし，「言うべきではなかった」という後悔，恥，罪悪感などの感情とともに体験されることと定義されるように（滝吉・鈴木・田中 , 2017），無意図的な陰口は，この社会的失言の認識の欠如によって起こりやすくなるだろう。すなわち，社会的失言の検出の失敗は，陰口を言ったことで，人を傷つけてしまっているという状態に対するメタ認知が機能していないことを意味している。

社会的失言の研究は，自閉スペクトラム症（ASD）の者に対しての研究が多く，心の理論の発展的な課題である社会的失言課題などを行うことによって，ASD 者が日常的な場面で，対人的なふるまいを行う際に必要とされる暗示的な社会的認知には難しさがあることを示した研究（滝吉他 , 2017）の他，社会的失言課題に対して，ASD の子ども自身が過失状況課題をどのようにして捉えているかを理解することの重要性を指摘した研究（田中 , 2016）などがある。

しかし，椿田（2006）は，社会的失言課題を誤答する要因は，自閉症的なものにだけ由来するとは限らないことを指摘しており，これは健常児にも当てはまることだと考えられる。また，社会的失言の認識の欠如に限らず，社会的失言の要素の 1 つであるメタ認知能力が低い定型発達者における問題は多い。大江・亀田（2015）は，メタ認知能力が低い者ほど，衝動性が高くなり，自己に関連する情報や他者の非言語的なメッセージを読み誤りやすくなる傾向があること，メタ認知の能力の乏しさが犯罪・非行への準備性を高め得ることを推察している。また，原田・渡辺（2011）は高校生における感情のメタ認知，言語化といった学習で感情のバランス化を図る活動を取り入れた SST の実践の必要性を指摘している。

上述のように，陰口や悪口の問題によって苦痛を感じる子供の多い現状にもかかわらず，メタ認知の低さによって生じる陰口についての研究がない現状を鑑み，本研究では，人間関係がより重視される中学生に焦点を当て，社会的失言という視点から無意図的な陰口を捉え，教師から見た生徒の社会的スキルや，生徒の情動知覚・情動調節のスキルが，無意図的な陰口に関する社会的失言の検出に影響するかを検討することを目的とする。

Ⅱ　方法

1．調査時期および調査協力者

20XX 年 10 月の 1 ヶ月間に，北陸地方の公立中学校のクラスの担任を持つ教師 14 名，1 年生から 3 年生の生徒 418 名に質問紙調査を行った。全回答者のうち，回答に不備がなかったクラスの担任を持つ教師 13 名，生徒 385 名（男性 186 名：女性 198 名：不明 1 名）を分析対象とした。

2．調査手続きおよび倫理的配慮

調査協力者には，アンケートは研究者以外だれも見ず成績に関係しないこと，個人を特定したり，個人を取り上げて研究されたりすることがないこと，大学で行われる研究だけに使用すること，回答をやめたくなった場合は，途中であってもやめてかまわないことをフェイスシートで教示し，回答に承諾した者のみ，アンケートへの回答を行ってもらった。アンケートはクラス単位時で実施され，その場で担任によって回収され，密封された。担任による回答は，子供のアンケートから 1 ～ 2 週間後に行われ，個々の担任別の封筒を渡し，回収した。

3．質問紙の構成

教師用の質問紙は，①フェイスシート，②生徒の行動面の社会的スキルを計る質問で構成された。生徒用の質問紙は，③フェイスシート，④中学生用情動知覚尺度（EAQ），⑤自閉症スペクトラム指数 10 項目版（AQ-J-10），⑥無意図的陰口場面を想定した漫画による場面想定法で構成された。

①フェイスシート（教師用）

フェイスシートでは，担任をしている学年とクラスの記入を求めた。回答は匿名であり，個人が特定されないことを明記した。

②教師評定の社会的スキル尺度（Social skill，以下 SS）

クラスの担任の教師に，岩澤（2014）の社会的スキルの定義である「人間関係を築いたり，人と上手に関わる技術のこと」を示したうえで，担任を持つ生徒一人ひとりの社会的スキルについて,「1：不足している」～「5：十分である」の5件法で回答を求めた。

③フェイスシート（生徒用）

フェイスシートでは，学年，クラス，番号，性別，年齢の記入を求めた。アンケートは成績に関係しないこと，大学で行われる研究だけに使用すること，回答をやめたくなった場合は，途中であってもかまわないことを明記した。

④中学生用情動知覚尺度

石津・下田（2013）が作成した中学生用情動知覚尺度（EAQ）日本語版の中の，「私は，自分がなぜ怒っているのか，よくわからなくなります」などの“情動の識別（DE)”,「私は，友達がどんな気持ちでいるのか，知りたいとは思いません」などの“情動の注目と分かち合い（AMUE)”,「自分が動揺したとき，私はそれを表に出さないようにします（逆転項目)」などの“非隠ぺい性（NHE)”,「私には，自分が感じている気持ちを，友達に説明することは難しいです」などの“情動の言語的伝達（VSE)”の4因子，17項目を生徒に「1：そんなことはない」～「3：いつもそうだ」の3件法で回答を求め，EAQの各下位尺度得点の合計得点を算出した。

⑤自閉症スペクトラム指数（Autism-spectrum Quotient:AQ）10項目版（AQ-J-10）

生徒の自閉症スペクトラム傾向を統制するため，生徒にKurita, Koyama & Osada(2005）のAQ-J-10を「0：あてはまらない」～「3：あてはまる」の4件法で回答を求めた。原版のAQは50項目から構成される信頼性と妥当性の確認された自己回答形式の尺度で，健常範囲の知能を持つ成人の自閉症傾向を簡便に測定できる（前田・金山・佐藤 , 2017)。採点方法は，各項目で自閉症傾向とされる側に該当する回答を選択すると1点が与えられるため，実質的には2件法とみなして合計得点を算出する。合計得点が高いほど，自閉スペクトラム症の特徴を顕著にもつことを示す。本研究においては，社会的失言に対する社会的スキルとEAQの得点の影響を統制する変数の一つとして測定した。

⑥無意図的な陰口に関する社会的失言の検出課題（Faux pas test：以下，FP）

Baron-Cohen, O'Riordan, Stone, Jones, & Plaisted (1999). のFaux Pas Testを参考とした，登場人物の1人が無意図的な陰口に関する社会的失言を言っていることを想定した場面の漫画を4つ，登場人物の中のどの人物も無意図的な陰口に関する社会的失言を言っていないことを想定した場面の漫画を2つ独自に作成した。また，生徒に自分のことを当てはめて読んでもらえるよう，性別ごとに質問紙を分け，男の子用は登場人物をすべて男に，女の子用は登場人物をすべて女にして，漫画による場面想定法を作成した。生徒には，男女別に2種類の質問紙を用意し,無意図的な陰口がある場面の場面を2つ，無意図的な陰口がない場面を1つ読んでもらった。そしてそれぞれの場面中で，①言うべきではなかったことを言った人物はいるかを2件法，②誰が，言うべきではなかったか，③なぜ言うべきではなかったのか，④無意図的な陰口を言われた人物はどのように感じるか，⑤無意図的な陰口を聞かれたと知った場合，言った人物はどのように感じるかを自由記述で回答を求めた。採点方法は各項目，正解の場合は1点，不正解の場合は0点とし，合計得点を算出した。合計得点が高いほど無意図的な陰口に関する社会的失言が検出でき，メタ認知が働いていることを示す。

Ⅲ　結果

1．相関分析

FPとEAQの下位尺度，AQ，SSとの相関を検討するために，相関分析を行った（Table1)。まずFPとEAQの下位尺度との関連を検討した結果，AMUEとの関連については，r=.18（p<.01)，NHEとの関連については，r =－.13（p<.05）という有意ではあるが非常に弱い関連が見られた。続いて，FPとAQとの関連については，r=－.14（p<.01)，また，FPとSSとの間には，r =.13（p<.05）という非常に弱い弱い関連が見られた。

2．分散分析

FP得点について性差，学年差を検討するために，

Table1　各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1.FP	1						
2.DE	0.02	1					
3.AMUE	0.18 **	0.34 **	1				
4.NHE	-0.13 *	0.35 **	0.26 **	1			
5.VSE	0.01	0.44 **	0.26 **	0.37 **	1		
6.SS	0.13 *	0.12 *	0.10 +	0.02	0.09 +	1	
7.AQ	-0.14 **	-0.3 **	-0.24 **	-0.13 *	-0.32 **	-0.17 **	1

** p < .01, * p < .05, + p < .10

2 要因の分散分析を行った（Table2）。その結果，性別（F（1, 376）=19.59, p<.01）と学年（F（2, 376）=8.04, p<.01）の主効果が有意であった。性別においては，男子より女子の方が有意に高いと示された（r=.23）。学年においては，Holm 法による多重比較を行った結果，1 年生より 2 年生の方が有意に高く（r=－.24），3 年生より 2 年生の方が，有意に高いことが示された（r=.18）。性別と学年の交互作用は，有意ではなかった（F（2, 346）=.17, ns）。

3．階層的重回帰分析

SS，EAQ の下位尺度による，FP の点数への影響を検討するために FP を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。Step1 では性別，学年を投入し，Step2 では AQ を，Step3 では EAQ の下位尺度である DE, AMUE，NHE，VSE を投入した。Step4 では，SS を投入したが，有意ではなかったため，以下においては Step3 までの結果を記す。分析の結果，Step3 において，EAQ の下位尺度の投入後の R^2 の変化量は有意であった（ΔR^2=.05, F（7, 290）=5.249, p<.01）。そして，性別，学年については，性別のみ FP に対し有意であった（b=-1.01, β=-.17, p=<.01, 95%CI［－.28, －.06］）。また，EAQ の下位尺度に関しては，AMUE が有意な正の影響を示し（b=0.27, β=.19, p<.01, 95%CI［.07, .31］），NHEが有意な負の影響を示した（b=-0.32, β=-.16, p<.01, 95%CI［－.29, －.04］）。Step4 では，SS 投入後の R^2 の変化量は有意ではなく（ΔR^2=.00, F（8, 289）=4.73, ns），FP に対しても有意な差は見られなかった（Table3）。

Ⅳ　考察

本研究の目的は，中学生において，社会的失言という視点から無意図的な陰口を捉え，教師から見た生徒の社会的スキルや，生徒の情動知覚・情動調節のスキルが，無意図的な陰口に関する社会的失言の検出に影響するかを検討することであった。

性別，学年，AQ 得点を統制したうえでの階層的重回帰分析による結果では，まず FP に対して，AMUE が有意な正の影響を示した。このことから，無意図的な陰口による社会的失言の検出の失敗を防ぐには，他者の情動に注目し，気持ちを分かち合おうとすることが重要であると示唆された。他者の情動に注目することは，葉山・植村・荻原・大内・及川・鈴木・倉吉・櫻井（2008）が共感性の認知的側面の構成要素として取り上げた，他者の感情に関心を持ち，注意を向ける傾向である「他者の感情に対する敏感性」にあたると考えられる。そして，この「他者の感情に対する敏感性」は，相手の立場に立って，相手の感情を理解する「視点取得」と強い関連がある（葉山他 , 2008）。このことから，他者の情動に注目

Table2　男女別の FP の平均値，標準偏差および分散分析の結果

	男子			女子			F 値		
	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年	性別	学年	交互作用
FP	5.57	7.25	6.08	7.22	8.46	7.47	19.59 **	8.04 **	0.17
	(3.41)	(3.03)	(3.40)	(3.03)	(2.43)	(2.64)	男子＜女子	1 年＜ 2 年	
								3 年＜ 2 年	

注 . 平均値下の（　）は標準偏差
** p < .01, * p < .05, + p < .10

Table3　FP を目的変数とした階層的重回帰分析の結果

目的変数	FP				
説明変数	b	SE	β	ΔR^2	ΔF
Step1					
性別	-1.01	0.34	-0.17 **		
学年	0.26	0.22	0.07	0.05	8.03 **
Step2					
AQ	-0.19	0.1	-0.11 +	0.01	4.31 *
Step3					
DE	-0.08	0.09	-0.05		
AMUE	0.27	0.09	0.19 **		
NHE	-0.32	0.12	-0.16 **		
VSE	-0.01	0.13	0	0.05	3.85 **
Step4					
SS	0.17	0.16	0.06	0	1.09

** p < .01, * p < .05, + p < .10

する生徒は，ただ相手の感情に注目するだけではなく，相手の立場に立って，感情を理解することができるため，言われた相手が傷つく無意図的な陰口を感知しやすいのだと考えられる。また，他者と気持ちを分かち合うことで，他者の気持ちの理解が促進されることも考えられるため，他者の情動に注目し，気持ちを分かち合うことが，無意図的な陰口に関する社会的失言の検出につながったと考えられる。

次に，NHE は FP に対して有意な負の影響を示し，自分の怒りや動揺の感情を隠すスキルが高いことが無意図的な陰口による社会的失言の検出に繋がることが示された。EAQ の下位尺度である NHE は，本来，情動を抑圧したり，隠ぺいしたりせずに他者に表現できる傾向を測定するものであり（石津・下田 , 2013），情動を抑圧，隠ぺいする生徒ほど情動の表現困難が懸念される。しかし，情動の抑圧や隠ぺいをする生徒は，自分の感情を表現するべきか判断した上で，抑圧や隠ぺいを行う場合も考えられ，このような生徒は，気まずさの認知や場の雰囲気を察しようとする力に長けている生徒と言えるだろう。石津・下田（2013）の研究においても，衝動の自制能力・情動を尊重した決断能力・挫折時に再びやる気を起こす力・他者共感力・集団と調和する能力と定義される情動知能と NHE は，他の EAQ の下位尺度と違い，唯一関連が示されなかった。

本研究では，情動の抑圧や隠ぺいを行う生徒の中にある，気まずさを認知や場の雰囲気を読み取ろうとする要素が，無意図的な陰口による社会的失言の検出に繋がったと考えられる。加えて，このことは自分の気持ちの抑圧や隠ぺいを行わない，自分の感情をより表現する生徒が，無意図的な陰口における社会的失言の認識が欠如しており，より頻繁に社会的失言を行う可能性を示している。ただ，感情の抑圧や隠ぺいを行う生徒は，場の雰囲気を感じ取りすぎ，周りに必要以上に適応することで辛い状態に陥ることも考えられる。これは，対人関係や社会集団において , 他者の期待に過剰に応えようとするあまりに , 自分らしくある感覚を失ってしまいがちな傾向とされる過剰適応傾向に近く，石津・安保（2008）は，過剰適応している子どもには周囲から判断しにくい個人的ストレスが存在している可能性を示唆している。このことからも，感情の抑圧や隠ぺいを行う NHE の低い生徒は，無意図的な陰口を検出でき，気まずさの認識や場の雰囲気を敏感に察知できる反面，過剰適応によるストレスなどのネガティブな側面を持つことも想定される。

そして EAQ の下位尺度の中では，FP に対して DE，VSE に有意な影響が見られなかった。まず DE において，自分の情動の識別の難しさに関しては，無意図的な陰口による社会的失言の検出に影響を及ぼしていないことが示された。しかし，本研究で関連が示された情動の抑圧や隠ぺいは，自分の情動を識別した上で行うと考えられるため，今後も詳しい検討が必要であるだろう。VSE においては，情動の言語的伝達の困難の度合いを測る下位尺度であり，情動の表現という点においては NHE と似た要素を持っている。しかし NHE の質問項目が，情動の表現を「するか，しないか」について聞いているのに対し，VSE の質問項目は自分の情動を伝えたり，説明したりすることが「できるかどうか」について聞いている。このような聞き方の違いが，FP に対して NHE には有意な関連があり，VSE には有意な関連がないという本研究の結果に繋がったのではないかと考える。すなわち，感情の表現が「できるかどうか」ではなく，感情の表現を「するか，しないか」が無意図的な陰口に関する社会的失言に関係しているのではないかということである。

また，SS に有意な影響は見られなかった。これは，教師から見た生徒の人間関係を築くスキルは，無意図的な陰口による社会的失言の検出に影響を及ぼしていないことを示している。本研究で定義した「人間関係を築いたり，人と上手に関わる技術のこと」に関する社会的スキルを高めるだけでは，必ずしも無意図的な陰口における社会的失言の検出ができるようになるわけではないことを示しているだろう。また，この結果は，無意図的な陰口は，教師から見えにくいという可能性も示唆される。日本のいじめの特徴として滝（2007）は「大人の目には見えにくい形で行われる」点や「主に教室の中で行われる」点を指摘している。本研究において測定された教師評定の社会的スキル得点は，担任教師の負担を考慮したうえで，1 項目にて測定しており，こうした研究の限界点を考慮した上で，改めて検討していく必要があると思われる。

ここまで本研究では，陰口や悪口の問題によって苦痛を感じる子どもが多い現状や，危害を加えることを意図しない陰口についての研究が少ないことを問題として捉え，無意図的な陰口に関する社会的失言の検出と教師評定による社会的スキル，自己評定による情動知覚・情動調節のスキルとの関連を検討してきた。その結果，無意図的な陰口に関する社会的失言に対して，AMUE が有意な正の影響を，NHE が有意な負の影響を示した。この結果から，無意図的な陰口の検出のために必要なスキルは，他者の情動に注目し，他者と気持ちを分かち合うスキルであることが示された。他者の情動に注目することに焦点を当てたスキルトレーニングは，ASD 者を対象としたものはあるが（北・軍司・後藤・稲垣・細川 , 2012），健常者に向けたものは少ない。しかし，葉山・高坂・池田・佐藤（2020）は，自分の気持ちを伝えるアサーションや相手を受容する態度の向上を支援するスキルトレーニングはノウハウ的な技能だけでなく，導入やシェアリングを丁寧に行うことでその背景にある他者への関心を高め，他者への志向性を高める効果もあることを示唆している。また，他者と気持ちを分かち合うスキルについて，葉山他（2020）はアサーションが感情の共有を

支援するとしている。陰口の中でも，メタ認知がうまく働かないが故の無意図的な陰口の低減のためには，自分の感情だけに注目し，感情を表現するのではなく，他者の感情に注目し，互いの気持ちを分かち合うことが重要であると考えられる。

今後の課題としては，本研究で使用した，漫画による無意図的な陰口に関する社会的失言の検出課題の検討が必要だと思われる。自閉症スペクトラム傾向を測る AQ と Faux pas test は，関連があるはずである。しかし，本研究で独自に作成した，漫画による無意図的な陰口に関する社会的失言の検出課題と AQ に関しては，非常に弱い関連，ないしはほぼ無相関にとどまった。こうしたことからも，質問紙の項目や，漫画による無意図的な陰口による社会的失言の場面の内容を，中学生に理解しやすいものに，さらに検討する必要性があることが示唆された。

また，無意図的な陰口に関する社会的失言に対して，個人によって言うべきか言うべきでないかという判断が，変わってくる可能性もある。金綱•濱口（2019）は，中学生の攻撃行動に対する善悪判断について，教師の自信ある客観的な態度が望ましい善悪判断を促進することを明らかにしている。本研究では，この道徳性の部分を考慮していない。今後，無意図的な陰口に関する社会的失言において，言うべきか言うべきではないかの望ましい判断を促すために，教師の生徒に対する態度にも着目していく必要があると考える。

Ⅴ　引用文献

相川 充 (2008). 小学生に対するソーシャルスキル教育の効果に関する基礎的研究 : 攻撃性の分析を通して. 東京学芸大学紀要　総合教育科学系，59，107-115.

Baron-Cohen, S., O'Riordan, M., Stone, V., Jones, R., & Plaisted, K. (1999). Recognition of faux pas by normally developing children with asperger syndrome or high-functioning autism. Journal of Autism and Developmental Disorders, 29(5), 407-418. https://doi.org/10.1023/A:1023035012436

原田恵理子・渡辺弥生 (2011). 高校生を対象とする感情認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果　カウンセリング研究，44，81-91.

葉山大地・高坂康雅・池田幸恭・佐藤有耕 (2020). 友人関係における共有様式に関する研究の今後の課題と展開―大久保氏・吉岡氏のコメントに対するリプライ―　青年心理学研究，31，136-140.

葉山大地•植村みゆき•萩原俊彦•大内晶子•及川千都子•鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (2008). 共感性プロセス尺度作成の試み　筑波大学心理学研究，36，39-48.

石坂達也・山本和英（2010）. 2 ちゃんねるを対象とした悪口表現の抽出　言語処理学会第 16 回年次大会発表論文集

石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響　教育心理学研究，56，23-31.

石津憲一郎・下田芳幸 (2013). 中学生用情動知覚尺度（EAQ）の日本語版の作成　心理学研究. 84，229-237.

岩澤一美 (2014). クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法　ナツメ社

金綱裕香・濱口佳和 (2019). 攻撃行動に対する中学生の善悪判断と判断に影響を与える要因の検討　教育心理学研究，67，87-102.

加藤弘通・太田正義・水野君平 (2016). いじめ被害の実態と教師への援助要請 : 通常学級と特別支援学級の双方に注目して　子ども発達臨床研究，8，1-12.

北 洋輔・軍司敦子・後藤隆章・稲垣真澄・細川 徹 (2012). 自閉症スペクトラム障害児に対するソーシャルスキルトレーニングの実践―脳機能計測を利用した客観的評価法―. 東北大学院教育学研究科研究年報，61，127-143.

国立教育政策研究所 (2016). いじめ追跡調査 2013-2015

Kurita, H., Koyama, T., & Osada, H. (2005). Autism-Spectrum Quotient-Japanese version and its short forms for screening normally intelligent persons with pervasive developmental disorders. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 59, 490-496.

前田由貴子・金山裕望・佐藤　寛　(2017). 大学生における自閉スペクトラム症傾向の実態調査 : AQ-J-10 を用いて　関西大学心理学研究 (8)，23-29,

文部科学省. (2019). 平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果について

大江由香・亀田公子 (2015). 犯罪者・非行少年の処遇におけるメタ認知の重要性―自己統制力と自己認識力，社会適応力を効果的に涵養するための認知心理学的アプローチ―　教育心理学研究，63，467-478.

岡安孝弘•嶋田洋徳•丹波洋子•森俊夫•矢冨直美 (1992). 中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係　心理学研究，63，310-318.

大竹恵子•島井哲志•嶋田洋徳•山崎勝之•狩野豊（1999). 攻撃性と社会的スキルの関係 : 中学生用攻撃性質問 (HAQS) を用いて　日本教育心理学会第 41 回総会発表論文集. 343.

酒井郷平・塩田真吾・江口清貴 (2015). トラブルにつながる行動の自覚を促す情報モラル授業の開発と評価－中学生のネットワークにおけるコミュニケーションに着目して－　日本教育工学会論文誌，39，89-92.

滝 充 (2007). Evidence に基づくいじめ対策　国立教育政策研究所紀要，136，119-135.

滝吉美知香・鈴木大輔・田中真理 (2017). 自閉症スペクトラム症者における「気まずさ」の認識に関する探索的研究　発達心理学研究. 28，63-73.

田中真理 (2016). 障害児支援を考えるモノサシとは：多義性と合理的配慮　発達心理学研究，27，312-321.
丹羽洋子・山際勇一朗 (1991). 児童・生徒における学校ストレスの査定　筑波大学心理学研究，13，209-218.
戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二（1997）. 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係　健康心理学研究，10，23-32.
椿田貴史 (2006). “社会的失言 (faux pas)” 検出課題と自閉症スペクトラム指数の臨床的適用に関する考察―二つのアセスメント事例から―　名古屋商科大学論集 50，87-96.
塚本貴文・濱口佳和 (2003). 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響：中学生の場合　筑波大学臨床心理学研究，15，45-55.
梅津直子・新井邦二郎・濱口佳和 (2012). 中学生における関係性攻撃と認知特性および適応との関連―敵意帰属を中心に―　筑波大学心理学研究，44，69-78.

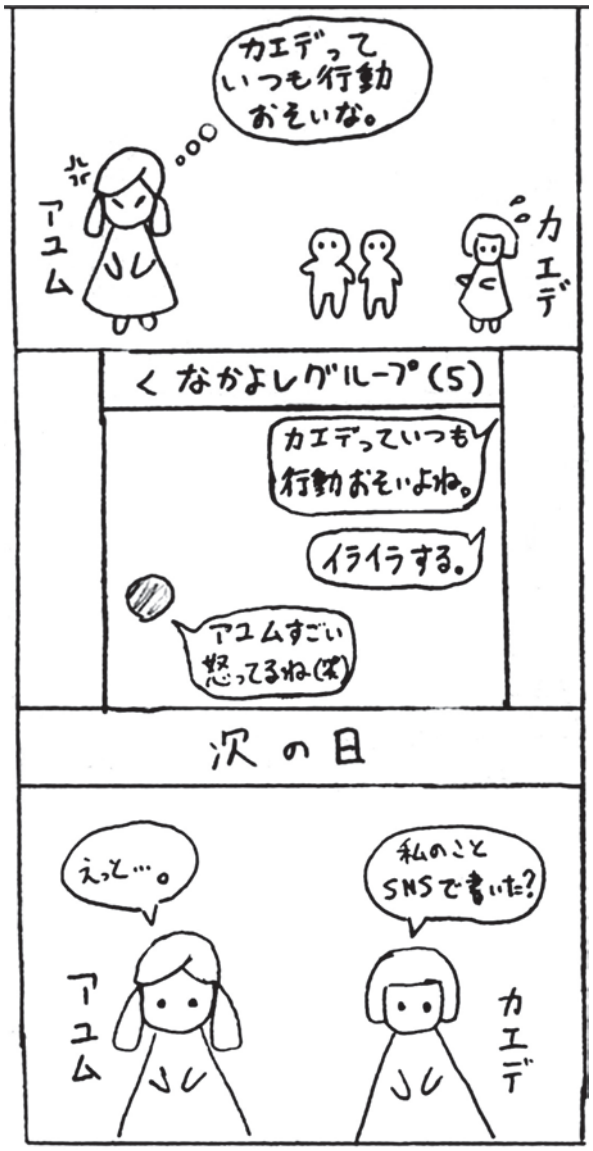
謝　辞

校務ご多用の中，アンケート調査を快く引き受けてくださった校長先生方，そして，お忙しい中，アンケート調査の実施や回答にご協力をいただいた先生方や生徒のみなさまに，心より感謝申し上げます。また，調査を依頼する際に，窓口となってくださった令和 2 年度前期富山大学人間発達科学部内地留学生の塚田香織先生，杉木貴昭先生に厚く御礼を申し上げます。皆様のご理解とご協力のおかげで，調査を実施させていただくことができました。本当にありがとうございました。

（2021年 8 月17日受付）
（2021年10月 1 日受理）

Appendix　本研究で使用した場面想定法（一部）

例 1）無意図的な陰口がある場面 1（女子）



例 2）無意図的な陰口がある場面 2（男子）